

農福と農泊と農協改革

夜空を見上げて星を観るとき、一つの星だけを観るよりも他の星に視線を転じてみることで、前の星がよりくっきりと目に映ったり星座全体が浮かび上がって見えるという経験をしたことがないだろうか。物事を理解したり進めたりする際にも、複数の事象をつなげて考えたり連携させることで理解が促進され物事が円滑に進むことがある。「農福連携」がまさにこれにあたっていて、農業や福祉の分野はそれぞれに多くの問題を抱え解決策を見いだすのに呻吟^{しんげん}しているが、ひとたび二つをつなげてみると、びっくりするぐらい視野が広がり思いもつかなかった答えが出たりするのだ。

農福連携はこの秋から新たなステップに踏み出そうとしている。9月16日には「人を耕す」「地域を耕す」「未来を耕す」をキーワードに全国の農福の取組みを顕彰するノウフク・アワード2020の募集が開始された。農福連携等応援コンソーシアムの活動が本格的に始まったこの機会に、もう少し連携の視野を広げて考えてみてはどうだろうか。

まずは農福と農泊をつなげて考えてみよう。農福の現場では様々な障害者が働いているが、障害者と一くりにしてしまうと実態は見えてこない。地道に単純作業を持続できる人もいれば、目先を変えないと長続きしない人もいる。対人関係を結ぶことが不得手な人もいれば人付き合いが大好きという人もいる。そうしたパーソナリティの幅に加え、強い行動上の障害があるかないかなど障害特性によって適した仕事内容は大きく変わってくる。幸い農業というフィールドは「百姓」という言葉に象徴されるように多くの仕事で成り立っているため、他産業に比べれば障害者に適した仕事を見つけやすいが、障害者のQOLや農福事業体の持続可能性の向上を図るためには、フィールドをもっと広く取り選択できる仕事内容の幅を広げることが不可欠である。そこで農福と農泊をつなげるとどんな化学反応が起きるだろうか。コロナ後の農泊の決め手は「体験、滞在」と「手造り感」にあると思うが農村にはそれを担う人が決定的に不足している。望ましい農泊を進めるうえでの働きを農福の担い手である障害者や農福事業体に担ってもらったらどうなるであろうか。農泊で地方に滞在するツーリストの食材には農福で生産した農産物や手造りの加工品を提供、宿泊に伴うリネンサプライや掃

除はそもそも福祉事業体の十八番である。農泊で体験してもらう農園の日常の管理も任せてもらいましょう。朝食会場で給仕するのは接客が大好きな知的障害のある人にやってもらいましょう。このように連想を進めてみると農福と農泊は極めて相性が良いことがお分かりいただけると思う。この二つが積極的に展開されれば、枝廣淳子さんが『地元経済を創りなおす』（岩波新書）で言うように、地域内の経済循環が活性化され地域を耕すことに貢献できるのではないかと。農泊の担い手である(株)農協観光が農福連携を広げる活動に着手したことにも注目しておいて欲しい。

次に農協改革とつなげると何が見えるだろうか。農協系統の皆さんはここ5年以上「自己改革」の旗の下に各種改革に取り組まれ多くの成果を挙げてこられた。しかしこれから最終コーナーとも言える准組合員の事業利用規制問題について来春には結論を出すことになっている。これまで同様農業者の所得増大への取組みを続けることは言うまでもないが、これからの時間では「JAが地域にとって不可欠の存在」であることについて国民各層からの理解を得ることが何より重要だと考えている。言い換えると地方行政がパワーを低下させているなかで、地域の持続可能性のためJAが一肌脱ぐことができるかが問われているのである。そこで提案だが、全てのJAにおいて何らかの形で農福に取り組んだらどうだろうか。取組み方はいろいろある。まず一番取り組みやすいのは各JAに「ノウハウ相談窓口」を置くことである。農福に取り組もうとしている農業者や福祉事業体は農地の確保や技術の習得に加え生産物の販路の確保など様々な相談事を抱えている。その解決に向け真摯に対応することで地域からの評価は大いに上がるだろう。JAの直売所やA-COOPでは農福産品が必ず売られるようになったら嬉しいものだ。また既に各地のJAで取り組まれている繁忙期の労力調整も有効な手法だ。野菜の収穫や出荷作業の手が足りない農業者と外仕事を求める就労支援施設をつなぎ大きな成果を挙げている。

夜空を見上げて星から星をたどって考えてきたが、農福も農泊も農協改革も指し示す先には「地域共生社会」という星座が横たわっている。たどり着くのは容易ではないが手に手を携えて前に進もうではないか。

((株)農林中金総合研究所 理事長 皆川芳嗣・みながわ よしつぐ)